

# 日朝信仰について

望 月 真 澄

## はじめに

行学院日朝は、現在日蓮宗の檀信徒からは“ニにつちようさん”、“目の神様”と呼ばれて親しまれ、特に学業成就・眼病平癒の守護神として信仰されている。この日朝の生涯について概観すると、<sup>①</sup> 応永二十九年（一四二二）正月五日伊豆国宇佐美村（現在、静岡県伊東市）に生まれ、四十一歳にして身延山久遠寺十一世の住持となり、<sup>②</sup> 明応九年（一五〇〇）六月二十五日身延山行学院で七十九歳にて遷化した。誕生の年は、日蓮の生誕より満二百年目にあたり、生涯にわたり行学に励んだことから多くの書物を著し、身延山にも多大な功績を残している。<sup>③</sup> この日朝に対する研究は、主に教学面が中心で、日朝を礼拝の対象とする日朝信仰については未だ深く掘り下げて研究がなされていない。そこで本稿は、庶民信仰の側面から、日朝信仰の諸形態について様々な角度から考察していくことにしたい。

## 一 日朝信仰の位置付け

### 日朝の信仰

日朝に対する人々の信仰面をみていく前に、まず日朝自身の信仰について概観してみたい。

日朝信仰について（望月）

日蓮宗の守護神の中には、人間が神格化されたものがある。例えば江戸時代の武将として有名な、加藤清正の「清正公」であり、これは武功があつた清正が人神として守護神化されたものである。そこで、僧侶としての日朝がどういふふうに着せられていたのかをみてみるため、身延山内の僧侶が日朝のことをどのような僧侶と位置づけ、その功績をたたえていたのかを眺めてみたい。本稿では、先師の研究業績を参考にして次のようにまとめてみた。<sup>5</sup>

- 1 身延山の諸堂宇を整備、拡大する。
- 2 身延山の年中行事・月行事やこれらの法則を定めて、制度を確立する。
- 3 門前町の区画割をする。
- 4 日蓮宗の教学を体系的に整え、子弟を教育する。
- 5 日蓮聖人の御書を書写し、注釈書を著す。

身延山の歴代住持においては、現在の堂宇の位置に身延山の中心部を移したことからしても偉大な人物であり、この他にも、靈宝目録の作成、月行事、年中行事の制定、舞楽の復興、諸法則の制定、支院末寺の奉仕制度など多くの功績があげられる。<sup>6</sup>これが身延山中興の師といわれる所以であり、現在も身延山の宝蔵の中には多くの著作や注釈書を残されており、これらをもても日蓮教学に精通した人であつたことが窺える。こうした人並みはずれた才能をもつた日朝に対する崇敬の念が、次第に庶民の学業成就の信仰につながつていった。著作である「補施集」に「去七月六日雖始之中途発病徒送時日了」<sup>6</sup>とあることから、明応四年（一四九四）七十四歳の折に眼病を患い、また「七月中旬我発病不慮得滅氣両条書之了」<sup>7</sup>と同六年（一四九六）七十六歳の折にも発病していることがわかる。こうして書物を認めている間に何度か眼病を患っているが、長享三年（一四八九）三月には眼病守護の本尊を認めており、<sup>8</sup>自らの眼病

の克服にみられる、人々の日朝に対する眼病守護の信仰が登場してきたのである。これらが相俟って日朝滅後間もなく人神として神格化され、守護神として礼拝されるようになっていったと考えられる。

一方、僧侶の立場から、日朝信仰の内面について考えてみると、一代にわたって祈祷に関する相伝・口決も集められていることに着眼したい。宮崎英修氏の『日蓮宗の祈祷法』によれば、

祈祷経口決 文明十八年（一四八六）十二月

最秘護符

大黒相伝

別本首題劍形相伝

鬼子母神相伝<sup>9)</sup>

といった資料があげられている。この中で、祈祷経口決は祈祷経の注釈書であり、次に守護神である大黒天や鬼子母神に関する祈祷相伝があげられている。こうした祈祷の方法は、久遠寺の後職の十二世日意、十三世日伝にも受け継がれている。<sup>10)</sup>

## 二 日朝信仰の形態

### 現在の信仰の姿

日朝に対する信仰は日朝信仰といった呼称で総称されるが、久遠成院日親や六老僧といった日蓮宗（宗門）先師の中で信仰を位置付ける時、朝師信仰といった呼称も使われる。いずれにしても日朝に対する崇拜の念は、眼病守護・

学業成就といった現世利益が主であったが、僧侶と一般庶民ではその内容に多少の違いがみられる。それは、身延山内僧侶の中では、日朝・日意・日伝といった三師を「身延山中興の祖」として仰いでいること<sup>1)</sup>であり、身延山のために貢献した先師として位置づけている。これに対し、庶民の間ではひとえに現世利益の眼病平癒の信仰が顕著であったことである。

それでは、現在の寺院で確認できる日朝堂と日朝尊像の所在について『日蓮宗寺院大鑑』、『日蓮宗大図鑑』、筆者が行ったアンケート調査

表1 日朝像の分布一覧（現在）

地域名	A	B
北海道教区	3	0
東北教区	5	0
関東教区	13	0
京浜教区	16	3
山静教区	51	26
北陸教区	4	1
中部教区	7	2
近畿教区	4	1
中四国教区	9*	1*
九州教区	6	0
合計	118	34

（出典）『日蓮宗寺院大鑑』

『日蓮宗大図鑑』

（註）日朝堂がある寺院は堂内に日朝尊像が勧請されているとした。

\*は過去にあったとされる寺院を含めた数

Aは日朝尊像を勧請する寺院数、Bは日朝堂のある寺院数

者が行ったアンケート調査により分布をみると表1のようになる。これを見ると日朝像・日朝堂ともに、山静教区（山梨県・静岡県）が圧倒的に多い。次いで京浜教区（東京都・神奈川県）や関東教区（京浜教区を除いた関東地方）といっ

た地域を中心にして日朝堂や尊像が奉安されており、現在の日蓮宗寺院における信仰分布の参考となろう。

日蓮宗寺院の本堂には、十界勧請の曼荼羅本尊が勧請され、その中に仏像として祖師像は勿論のこと、その両脇に開山や中興といったその寺院にゆかりの上人像が奉安されている例が多い。そこには、六老僧や九老僧、そして日親、日奥といった現在の教団やその寺院にとつてゆかりのある僧侶が祀られている。この中でも、日朝像を本堂に勧請し、また日朝堂を建立し、単独で奉安している寺院が存在する。

表2 日朝像の造立

	造立年月日	西曆	寺院名	所在地	銘文	像容	出典
1	明応四、五、	一四九五	覚林坊	山梨県南巨摩郡身延町身延	なし	読経像	『身延山坊跡録』
2	寛永十、六、吉	一六三三	柳川寺	山梨県南巨摩郡猷沢町柳川	(本体首内墨書銘) 「 <u>寛永十癸酉六月吉日</u> 「 <u>蓮坊日満</u> 寛永十癸酉六月吉日」 相読作者 四条大仏師小貳入道、 (像底部墨書銘) 当山第十二世円教院日意聖人」 寛永十年癸酉七月十一日奉相読」	読経像	『猷沢町誌』
3	寛文二、	一六六二	仏乗寺	山梨県中巨摩郡昭和町河東中島	なし	読経像	『昭和町誌』
4	元禄二、霜、 二十六	一六八九	円応寺	山梨県南都町上佐野 (同町中野道善寺(現在廃寺) に奉安されていたもの)	(台座裏墨書銘) 「昭和九年当院勧請シテヨリ」身延十一 代日朝大上人ト祀ル仏(一)大正十四	読経像	円応寺 日朝像

	5	享保元、八 一七二六 海源寺	神奈川県海老名市中新田 神奈川県海老名市中新田 （像底墨書銘） 延山門流「海源寺」開基日朝上人像 十一世日遠代「刻彫之」 享保元丙申八月 開眼之「房州小湊」日□□ 大野山第七世日堯（花押） 元禄第二己巳年霜月二十六日	說法像	海源寺 日朝像
6	寛政九、八、 二五	一七九七 法城寺	山梨県東八代郡八代町 （台座底墨書銘）千時「寛政九丁巳歳 八月廿五日」（以下略） （厨子背銘） 文化二年六月二十五日建立 導師法藏寺二十二世日勒	說法像	法城寺 日朝像
7	文化二、六、 二五	一八〇五 蓮性寺	静岡県清水市谷津 （鞘像） 文政十一年戊子六月廿五日 朝師堂普請成就入像供養「行学院 日朝上人」尊像一体「新造」 日円山二十世「松寿院日現（花押）」 京都仏師 如水作之 玉沢定慶作	私子像	蓮性寺日朝像 厨子
8	文政十一、六、 二五	一八二八 妙法寺	東京都杉並区堀の内 （鞘像） 文政十一年戊子六月廿五日 朝師堂普請成就入像供養「行学院 日朝上人」尊像一体「新造」 日円山二十世「松寿院日現（花押）」 京都仏師 如水作之 玉沢定慶作	（鞘像） 読経像 （胎内 像） 私子像	「妙法寺文化 財総合調査」

13	12	11	10	9
(江戸時代)	(江戸時代)	(江戸時代)	嘉永六、四、一八五三	嘉永四、五、二十五
長遠寺	誕生寺	東漸寺	大長寺	正行寺
山梨県中巨摩郡若草町鏡中条	千葉県安房郡天津小湊町小湊	静岡県庵原郡蒲原町蒲原	東京都府中市若松(江戸時代は江戸麻布永坂町にあり)	山梨県南巨摩郡富沢町楮根
(像底部墨書銘) 京都「仏師」林如水	(像底部墨書銘) 朝師御衣替施主「大森村」仏師佐京 辻之坊現住「恵仲院日受代」再彩色 本玉日顛「代」		(台座裏墨書銘) 功德主「神奈川宿住人」信者中世話人 御先祖安□□「金老阿」銀座四丁目 井伊田屋熊太郎「金式分」 嘉永六丑四月出来 当山二十三世「日神代」	(像底部墨書銘) 嘉永四辛亥五月二十五日「奉内積大 乗妙典二万参千百余□」百七十二万千 二百「」 両講主大僧都 日□(花押) 奉点眼南無日朝大聖人 祈願之男女御利益「广大」
読経像	読経像	読経像	読経像	読経像
長遠寺 日朝像	寺尾英智・緒 方啓介両氏作 成「誕生寺仏 像調査報告書」	東漸寺日朝像 『日蓮宗寺院 大鑑』には享 保年間とある	大長寺 日朝像	正行寺 日朝像

そこで、現在の日蓮宗寺院で史料的に江戸時代造立の日朝像と確認できる日朝像を編年的にあげてみると、表2のようになる。身延覚林坊の明応四年（一四九五）の例を除き、他は江戸時代に入ってから勧請となっていることがわかる。寛永十年（一六三三）の山梨県柳川寺の例を始めとして各地に建立され、日朝堂の建立と併せて各地域において直接礼拝される対象の尊像として造立されていったと思われる。これも山梨県内の寺院を始め、海老名市海源寺や清水市蓮性寺といった日朝開創となる寺院であり、堀の内妙法寺、小湊誕生寺といった寺院でも江戸後期になると地域の眼病守護信仰の拠点として造立されていったものと考えられよう。明治時代以降の造立年代のものは数多くあり、身延山信仰の地方伝播から、各地域で祀られるようになっていったと考えられる。

これらの寺院のほとんどが身延山久遠寺の末寺であり、身延門流を中心に展開したことがわかる。また、地域をみると、山梨県や静岡県、神奈川県、東京都と日朝開基となる寺院や開創寺院といったゆかりの地域に勧請される場合が顕著であった。そして、日朝信仰の対象となる尊像は、眼病守護の信仰が高まると各地の寺院で奉安されるようになる。そこで、まず日朝信仰の中心となる、身延山内覚林坊に奉安される日朝像についてみてみよう。「身延山諸堂建立記」<sup>(1)</sup>によれば、

一 朝師堂 四間 宝永元甲申十一月廿五日

二間半 省師棟札

朝師御木像者五十八歳之絵像之御影ヲ奉写シ明応第四乙卯五月日作者備中法眼一条烏丸願主日恒淨蓮坊日源卜御像二有之明応四年乙卯者御存生七十四歳之御時也明応九庚申六月廿五日七十九歳遷化也

東谷覚林房朝師開基隱居入滅地故三二世日省師代十七世玄理院日儀在住之節勸化建立之祈眼病有靈驗諸国聞之信

## 敬日篤

と、日朝五十八才の折に描かれた絵像を写した木像と伝えられ、明応四年（一四九五）五月に備中法眼一条鷹丸の作と記されている。また、

開基日朝上人 存生ノ影像持経朝師ノ筆御頭ノ内ニ収ム、齒ヲ全身入レ瓶ニ石ノ蓋有レ之、

日儀堂建立ノ時、掘テ之移ニス堂ノ下ニ<sup>14</sup>

と、木像の頭部の中に日朝の御齒を収めているといった特徴ある像である。明応四年（一四九五）は、日朝が七十四才の時、その五年後には遷化しているので、ほぼ晩年の姿といえる。なお、この像の願主は覚林坊二世日恒と浄蓮坊日源となっており、これが各地における日朝像の基本形となったと考えられる。各地域における日朝像も、覚林坊のものを写して勧請されている例が多くみられるのである。

## 日朝堂の存在

次に、日朝を勧請する堂宇としての日朝堂の存在についてみてみると、表3のようになる。愛媛や新潟県の例を除き、山梨県・静岡県・東京都・神奈川県といった日朝像の分布と同じく、ゆかりの地域に多いことがわかる。勧請される堂宇の名称も、朝師堂・朝尊堂・日朝堂といった呼称があり、建立年代は江戸時代の中後期になるものが大部分を占める。地域としてみれば、ほとんどが山梨県で、これらの寺院は、ほとんどが身延山久遠寺末寺・孫末寺で、尊像と同じく身延門流を中心に信仰圏が広がっていることがわかる。これも参詣者が増加してくる江戸時代後期からであり、身延山信仰の高まりと期を一にして各地に堂宇が建立されていたと考えられる。

日朝信仰について（望月）

表3 日朝堂の存在（江戸期～現在）

	寺院名	所在地	呼称	建立年代	西暦	日本寺名	出典	備考
1	覚林坊	山梨県南巨摩郡身延町	朝師堂	寶永元年	一七〇四	身延山久遠寺	「身延山坊跡録」	
2	円頓寺	愛知県岡崎市	日朝堂	正徳四年	一七一四	身延山久遠寺	「日蓮宗寺院大鑑」	
3	法伝寺	山梨県西八代郡市川大門町	日朝堂	文化元年	一八〇四	身延山久遠寺	「峡南の郷土」36号	
4	大長寺	東京都府中市若松	日朝堂	文化十二年	一八一五	村田妙法寺	「寺歴」大長寺刊	昭和三十九年麻布より 移転
5	妙法寺	東京都杉並区堀の内	日朝堂	文政十一年	一八二八	身延山久遠寺	「妙法寺文化財総合 調査」	
6	長遠寺	山梨県中巨摩郡若草町	日朝堂	寛政年間	一七八九 一八〇〇	身延山久遠寺	「甲斐国社記寺記」	
7	定林寺	山梨県西八代郡六郷町	日朝堂	江戸時代		身延山久遠寺	「甲斐国社記寺記」	元禄二年十月十三日、 六世日随現在地に移転 後建立
8	蓮華寺	山梨県南都留郡足和田村	朝師堂	江戸時代		身延山久遠寺	「甲斐国社記寺記」	「日蓮宗寺院大鑑には」 天保十三年頃とある
9	立正寺	山梨県東山梨郡勝沼町	朝師堂	江戸時代		身延山久遠寺	「甲斐国社記寺記」	
10	遠照寺	山梨県北巨摩郡須玉町	日朝庵	江戸時代		身延山久遠寺	「甲斐国社記寺記」	
11	正行寺	山梨県甲府市西下条	日朝堂	江戸時代		身延山久遠寺	「甲斐国社記寺記」	
12	仏成寺	山梨県中巨摩郡昭和町	日朝堂	江戸時代		身延山久遠寺	「甲斐国社記寺記」	

日朝信仰について(望月)

30	妙行寺	東京都新宿区若葉町	日朝堂	江戸時代		身延山久遠寺	【御府内寺社備考】	
29	仏成寺	山梨県南巨摩郡南部町	朝師堂	江戸時代		身延山久遠寺	【甲斐国社記寺記】	
28	金竜寺	山梨県南巨摩郡身延町	日朝堂	江戸時代		大野本遠寺	【甲斐国社記寺記】	
27	本成寺	山梨県南巨摩郡中富町	朝師堂	江戸時代		身延山久遠寺	【甲斐国社記寺記】	二十五世日行代に建立
26	円応寺	山梨県南巨摩郡畷沢町	朝師堂	江戸時代		身延山久遠寺	【甲斐国社記寺記】	
25	宝林寺	山梨県南巨摩郡増穂町	朝師堂	江戸時代		身延山久遠寺	【甲斐国社記寺記】	
24	浄信坊	山梨県南巨摩郡増穂町	朝師堂	江戸時代		不明	【甲斐国社記寺記】	昌福寺塔中
23	昌福寺	山梨県南巨摩郡増穂町	朝師堂	江戸時代		身延山久遠寺	【甲斐国社記寺記】	
22	長久寺	山梨県中巨摩郡甲西町	朝師堂	江戸時代		身延山久遠寺	【甲斐国社記寺記】	
21	法源寺	山梨県中巨摩郡甲西町	朝師堂	江戸時代		鏡中条長遠寺	【甲斐国社記寺記】	
20	生善寺	山梨県中巨摩郡甲西町	朝師堂	江戸時代		小室妙法寺	【甲斐国社記寺記】	
19	実成寺	山梨県中巨摩郡甲西町	朝師堂	江戸時代		市之瀬妙了寺	【甲斐国社記寺記】	
18	妙源寺	山梨県中巨摩郡甲西町	朝師堂	江戸時代		身延山久遠寺	【甲斐国社記寺記】	
17	蓮成寺	山梨県北巨摩郡長坂町	朝師堂	江戸時代		身延山久遠寺	【甲斐国社記寺記】	
16	蓮経寺	山梨県中巨摩郡檜形町	朝師堂	江戸時代		市之瀬妙了寺	【甲斐国社記寺記】	
15	蓮華寺	山梨県中巨摩郡白根町	日朝堂	江戸時代		不明	【甲斐国社記寺記】	
14	福王寺	山梨県中巨摩郡白根町	日朝堂	江戸時代		鏡中条長遠寺	【甲斐国社記寺記】	
13	妙善寺	山梨県中巨摩郡白根町	朝師堂	江戸時代		鏡中条長遠寺	【甲斐国社記寺記】	

日朝信仰について（望月）

31	経王寺	東京都台東区元浅草	日朝堂	江戸時代	池上本門寺	『日蓮宗寺院大鑑』	
32	承教寺	東京都港区高輪	日朝堂	江戸時代	池上本門寺	『日蓮宗事典』	二十七世日善代に奉安 建立、現在朝日堂と呼 称
33	本門寺	東京都大田区池上	日朝堂	江戸時代		『大田区史』 寺社1	
34	宏善寺	東京都町田市	日朝堂	不明	身延山久遠寺	『町田市史』	
35	定徳寺	愛知県名古屋市中村区	不明	不明	京都本圀寺	『日蓮宗寺院大鑑』	
36	妙栄寺	新潟県南蒲原郡	日朝堂	不明	新発田法華寺	『日蓮宗寺院大鑑』	
37	妙円寺	愛媛県松山市	日朝堂	不明	身延山久遠寺	『日蓮宗寺院大鑑』	昭和二十年に焼失
38	本覚寺	静岡県三島市	日朝堂	不明	身延山久遠寺	『日蓮宗寺院大鑑』	
39	東漸寺	静岡県庵原郡蒲原町	朝師堂	不明	身延山久遠寺	『日蓮宗寺院大鑑』	
40	法華寺	静岡県榛原郡相良町	朝師堂	不明	小笠本勝寺	『日蓮宗寺院大鑑』	

（註）現在存在する堂宇だけでなく、過去に存在したものも含める

身延山内覚林坊の日朝堂は、先に紹介した『身延山坊跡録』によると、十七世日儀代に建立され、「朝師堂建立の祖」と記されている。<sup>15</sup> この朝師堂は、延享四年（一七四七）七月七日に焼失したが、この折に、身延三十六世日潮の筆なる堂宇の扁額も類焼してしまったと伝えられる。<sup>16</sup> しかし、身延山における日朝の廟所がある日朝堂は、全国の日朝信仰の拠点になるものであり、明和三年（一七六六）十二月に二十二世日養代に直ちに再建された。<sup>17</sup> ここには現在も日朝ゆかりの宝物や絵馬が奉納されている。<sup>18</sup>

表4 日朝の縁日（現在）

月 日	寺 院 名	備 考
1月25日	名古屋市日行寺	
2月16日	甲西町妙源寺	
3月不定期日	鯉沢町柳川寺	七面大明神祭典の折に行う
6月24日	富士宮市常泉寺	
6月25日	南部町仏成寺・市川大門町法伝寺 若草町長遠寺・名古屋市日行寺	
7月24日	甲府市正行寺	
7月25日	大田区本門寺	
8月23～25日	甲西町実成寺	
毎月24日	三島市本覚寺・蒲原町東漸寺 鎌倉本覚寺	
毎月25日	大田区本門寺・台東区浅草経王寺	

日朝信仰について（望月）

池上本門寺では、天明年間の境内絵図をみると現在の位置に常唱堂（日朝堂）が描かれていることから、江戸時代中期には、信仰の拠点である堂宇が建立されていたことがわかる。<sup>19)</sup>

#### 日朝の祭礼

日朝の祥月命日は六月二十五日となっているが、現在全国各地で筆者が管見する、日朝関係の祭礼が行なわれている日をおげると表4のようになる。名古屋日行寺は昭和二十七年の開創であるが、ここでは日朝大祭として、毎年一月二十五日、六月二十五日に行なっており、「桜町の日朝さま」と呼ばれ、地域の人々に信仰されている。なお、この縁日は地域によって違う場合があり、池上本門寺日朝堂では、大祭が毎年七月二十五日、例祭が毎月二十五日、鎌倉本覚寺は、「日朝上人御大会」として七月二十四日に大祭を行ない、これは月遅れの行事となっている。富士宮市常泉寺では、祥月命日前日の六月二十四日に大祭が行なわ

日朝信仰について（望月）

れ、多くの参詣者があつたという。また、浅草経王寺では、毎月二十五日に信行会を行なっているが、その折に施餓鬼法要と祈祷会が厳修されているのである。こうした縁日の始まりは、江戸の年中行事を記した『東都歳時記』<sup>2)</sup>によると、毎月二十五日が縁日となっており、既に江戸時代後期には恒例の行事となっていたことが明確となる。

伝記・縁起の作成

日朝の伝記や縁起に関して、筆者が管見する限り残存する史料は少ない。その中でも、次の三点の史料は日朝の霊験を物語る格好の史料である。そこで、これらの史料の中で信仰に関する部分をそれぞれ抽出し、比較してみると次のようである。

(a) 『本化別頭仏祖統紀』 「第十一代行学院日朝上人伝」<sup>2)</sup> 享保十五年（一七三〇）刊

（前略）師六根之中眼根少ク悩アリ、恒ノ言ニ云、諸ノ眼根之障殊ニ妨ニ道行ニテ、吾死セバ守護セン、他ノ眼根ヲ果シテ而眼病者拜シテ廟ヲ起セバ誓ヲ則立ニシテ而得レ験ヲ、是以迄今ニ廟前眼病者為レ市ヲ、設ヒ雖ニ遠国ニト毎月二十五日唱題一百遍南無身延十一代日朝尊者ト七遍至信不懈盲者モ得レ験ヲ（後略）

(b) 『朝尊誕終記』<sup>2)</sup> 元治二年（一八六五）刊

弟子日恒。彫ニ刻師之真影。師開眼曰。予。為ニ法難ニ辛。萬状。然猶眼根尤淨因発誓願。我遷化後擁ニ護衆生眼根。且曰。我死後三日。開棺視レ我。師遷化後。果「如其命」。徒弟開棺。眼睛災々然。視者嘆異焉。世間「患眼者。毎月念レ五。念レ師祈願。唱題一百。称ニ諱七遍」。則無ニ不癒。其信心之至。或旨者復レ明云。「元是下方涌出身。応ニ機濁世ニ救ニ沈倫。人天之目六根」淨。永読群生弘ニ眼塵。」（中略）朝善寺二十世日泰代」

日朝上人靈像並御本尊

是ナルハ当山十一代眼病御守護行学院日朝上人ノ靈像並朝上人御認ノ御本尊也、夫レ 人ノ身ノ六根イツレモ大節ナレトモ殊ニ眼第一ノ肝要也、日朝上人一千日ノ間法華經誦セ玉誓ヒテ立テテ曰ク、若シ末代眼病ニテ身心共ニ悩ム者アラハ、我ヲ祈リ日々題目ヲ唱ヘ南無身延十一代行学院日朝上人ト吾名ヲ称セハ、我必ス守護シテ眼病平癒ヲ得セシメ、尚ヲ将来ニハ仏知見ヲ開カシメント二世ノ誓願ヲ立サセ玉フ靈像ナレハ、生前値遇ノ思ヒヲナシテ信心ニ御拝アラセマス

(a) の身延山三十六世日潮の『本化別頭仏祖統紀』は、日蓮宗先師を中心とする伝記の代表的なものであるが、他にも (b) の伊東市朝善寺に残る「朝尊降誕記」という史料がある。これは、伊豆朝善寺に所蔵されており、日朝の誕生から遷化するまでの伝記を記した木版刷で、元治二年（一八六五）、朝善寺二十世日泰代に作成されたものである。また、(c) は、身延山奥ノ院祖師の江戸出開帳の折に日朝筆曼荼羅本尊と日朝像が共に開帳宝物のひとつとして出されたが、その縁起が記されたものである。これらの中で、(b) は (a) の『本化別頭仏祖統紀』に準じているが、「弟子日恒、師の真影を彫刻す」と師匠の日朝の尊像を彫刻したと記されている。また、「世間の眼を患う者は、毎月五を念じ、師を念じて祈願し、唱題は一百、いみなを称えること七遍、則ちまさざる無し、其の信心の至りは、或いは盲者明を復すと云う」と、死後三日してお棺を開いてみると、その眼は輝いていた様子が記され、眼病守護の功德がその後に説かれている。これも唱題百遍・いみな、即ち『本化別頭仏祖統紀』にあるように、「南無行学院日

朝」と称えること七遍、という功德が示されている。これに関して、（c）をみると、「若シ末代眼病ニテ身心共二悩ム者アラハ、我ヲ祈リ日々題目ヲ唱へ南無身延十一代行学院日朝ト吾名ヲ称セハ、我必ス守護シテ眼病平癒ヲ得セシメ、尚ヲ将来ニハ仏知見ヲ開カシメント二世ノ誓願ヲ立サセ玉フ霊像」とあり「信心のために礼拝する」と、その眼病守護の現世利益の内容は（a）・（b）・（c）ともほぼ共通していたことがいえる。

さらに、日朝関係資料の存在について、天保年間に隆盛を極めた江戸鼠山感応寺（感）が所蔵する宝物から探つてみたい。すると、江戸城大奥女性やゆかりの僧侶が、寄進や感得といったことにより宝物が揃つていったことがわかる。その中で、感応寺初祖日詮が感得したもののの中に、「日朝德行記一巻」や「日朝曼荼羅本尊一幅」があつたことに着目したい。この德行記は生涯の中で特筆すべき事柄が記されたもので、日朝をたたえた史料といえるものである。この宝物の存在からして、江戸時代後期は日朝信仰が高揚してきた時期であり、この頃に日朝の霊験を語った伝記や縁起類が各地で作成されていったと考えられる。

#### 木版刷の日朝御影の頒布

身延山久遠寺支院である覚林坊は、先に検討した如く、日朝信仰の中心的な位置を占めていることから、日朝堂奉安の日朝尊像の木版刷御影が多く作成された。現在、管見できる木版刷尊像の例は、厚木本照寺、身延覚林坊、鎌倉本覚寺、江戸麻布大長寺、伊豆朝善寺、池上本門寺の例が確認できるが、いずれもその寺院に奉祀されている日朝像が木版刷によって作成されている。よって、これらを一覽してみると表5のようになる。

これから察するに、池上常唱堂の例を除き、他は日朝の坐像であることが知られる。尊像の形は、大別すると読

表5 形木 日朝御影の存在

番号	勸請寺院	内 容	出 典
1	厚木本照寺	開山行学院日朝大上人 時延享四丁卯稔三月二十五日開眼之也 南無妙法蓮華經 (日朝說法坐像) 賜紫 日寛 (花押) 其目清淨悉見三千界 三十七世 眼病救護靈跡相州古沢本照寺安置	厚木市本照寺藏
2	身延覚林坊	南無無辺行菩薩 身延山中興 南無上行菩薩 眼病守護 日朝大上人 南無多宝如来 今此三界 身延山 南無妙法蓮華經 皆是我有 南無釈迦如来 其中衆生 (日朝読経坐像) 南無淨行菩薩 而今 悉是吾子 南無安立行菩薩 此処 多諸患難 覚林坊 唯我一人能為救護	身延町覚林坊藏
3	鎌倉本覚寺	以是莊嚴故 鎌倉 南無行学院日朝上人 (日朝說法坐像) 其目甚清淨 本覚寺	伊勢原市妙藏寺藏
4	麻布大長寺	以是莊嚴故 南無行学院日朝上人 日朝大上人 東京都麻布永坂町 其目甚清淨 (日朝読経坐像) 本妙山 大長寺	府中市大長寺藏
5	伊豆朝善寺	南無妙法蓮華經 豆州宇佐美邨朝善寺 開山日朝上人 (日朝說法坐像)	伊東市朝善寺藏

経像と説法像があり、日朝入滅地である覚林坊の読経像形と鎌倉本覚寺の説法像形の二タイプがあることがわかる。両者の中でも、先述した表2を参照すると、行学の二道を励んだ日朝の像容として読経像が多い。また、讀文として図の左右に「以是莊嚴故 其目甚清淨」と目に対する功德の文が記されている。朝善寺の版木には、

日朝信仰について（望月）

6	池上本門寺	以是莊嚴故 南無行学院日朝上人（日朝合掌立像） 其目甚清淨 常唱堂	池上	池上本門寺藏
7	厚木本照寺	以是莊嚴故 南無日朝大上人（日朝說法坐像） 其目甚清淨	古沢村	厚木市本照寺藏

（註）

（一）内は筆者が補ったもの

4の大長寺は、昭和三十九年に府中市に移転している

豆大見村白岩村

花見月廿四日

与右衛門

元治二乙

同熱海村新宿

丑

奉納心願経

山崎屋忠吉

彫師 同 現七郎

とあり、作成年代は元治二年（一八六五）花見月二十四日で、これは江戸時代幕末期の頃から大量に刷られ、頒布されていたと考えられる。こうして、木版刷の尊像が大量印刷技術の向上によって広く庶民の手に渡り、身近なところで礼拝されるようになったのである。信徒は、これらのゆかりある寺院に参拝した折に寺院から授与されたか、または身延山・池上や誕生の地伊東といった霊蹟になかなか参詣できないため、参拝の折に版刷の御影を買い求めたと考えられる。いずれにしてもこれを家に持ち帰り、仏壇の脇や床の間に掲げて日常礼拝したことが推察される。

絵馬の奉納

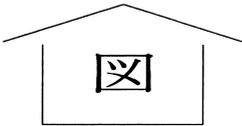
神仏への祈願として絵馬を奉納することは一般の寺院でも行なわれていたが、伊東市朝善寺では幕末期から明治・昭和期の絵馬類が所蔵されている。<sup>27)</sup>年代が記されているものは僅かであるが、その中でも古くは安政三年付（一八五六）のもので、大部分は明治時代のものである。その絵馬の図柄は図1から図3に示した如く、大きく文字型と図型、そして両者の複合型のものに分けられる。文字型としてaからdにあげたように、「め」と大きくひらがなで書かれ

(図1) 文字型絵馬



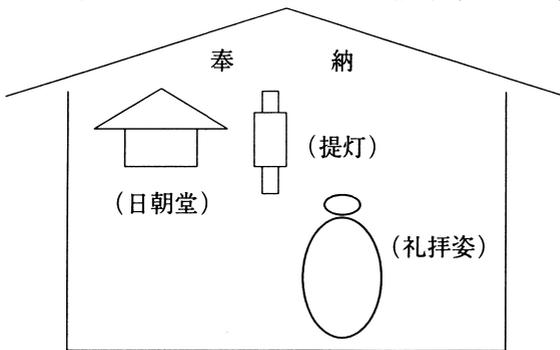
- 文字型
- a め
  - b め め
  - c め (貨幣でかたどってあるもの)
  - d 心

(図2) 図型絵馬



- e 男性(女性)礼拝姿
- f 親子礼拝姿
- g 日朝堂と提灯
- h 幣束と礼拝姿

(図3) 複合型絵馬 (e+h型)



たものや、左右の「め」と「め」が書かれ、ひとつが逆に描かれているものがある。図型としては e から h のように分けられ、日朝堂や日朝像や礼拝している姿が描かれている。そして、男女や親子が日朝像や日朝堂を拜んでいるといった文字と図の複合型のものもある。こうした絵馬は、個人祈願の対象として幕末期から寺院に奉納され、眼病平癒の祈願内容が絵馬の絵柄に盛り込まれていたことは、日朝に対する祈りの一表現であったといえよう。

### 御守・御符の信仰

身延覚林坊では、現在も眼病御符があるが、ここでは眼病平癒の功德について考えてみたい。特に、日朝信仰の対象となる代表的な資料として眼病札、御守、開帳札がある。開帳札は日朝堂において日朝の尊像を礼拝し、その御利益を開帳といった儀礼を通じていただけられるものである。現在も使用される開帳札には眼病守護の功德がうたわれ、眼根清浄と朱印判が押されている。こうした御札・護符類の祈願文からも、日朝に対する現世利益の信仰が窺えるのである。<sup>(28)</sup> また、文化十一年(一八一四)『江戸神仏願懸重宝記』<sup>(29)</sup>という史料には、江戸の神仏の願掛け習俗にみられる庶民信仰の姿が記されている。そこには疱瘡守護・盗賊除けといった様々な神仏の御利益があげられ、眼病平癒の功德も説かれている。当時は、所願成就・当病平癒という祈願が庶民信仰の基本であったといえるのである。この霊験が相撲の番付表の形で表現され、庶民の信仰の対象となる御利益信仰のひとつの傾向がわかる。すなわち江戸時代後期の江戸には、様々な流行り病が蔓延しており、<sup>(30)</sup> 眼病平癒の祈願が頻繁にあることは、当時眼の病が流行っていたことが考えられるのである。<sup>(31)</sup>

表6 日朝の遠忌

遠忌	年代	西暦	遠忌の厳修
百遠忌	慶長 4	1599	
百五十遠忌	慶安 2	1649	
二百遠忌	元禄 12	1699	
二百五十遠忌	寛延 2	1749	
三百遠忌	寛政 11	1799	祈祷札（身延山覚林坊）、
三百五十遠忌	嘉永 2	1849	報恩法要（身延山久遠寺）、 祈願札（身延山覚林坊）
四百遠忌	明治 32	1899	報恩塔（南部町仏成寺・若草町長遠寺・ 台東区経王寺・天津小湊町誕生寺）
四百五十遠忌	昭和 24	1949	報恩法要（身延山久遠寺）
五百遠忌	平成 11	1999	各地のゆかりの寺院で法要厳修・報恩塔 建立

日朝信仰について（望月）

遠忌の厳修

日蓮に、五十年・百年毎の遠忌があるように、六老僧や宗門先師、法縁の縁祖といった偉大なる功績を果した僧侶の遠忌が各寺院で営まれる。日朝も身延山中興の師として多くの功績を残された先師であり、上人をたたえる忌日、すなわち五十年・百年毎におこなわれる遠忌が営まれていく。この遠忌に関して、日蓮の遠忌の例をみると四百遠忌や四百五十遠忌の法要のみならず、各地の寺院で題目塔が建立されている。そこで、日朝の過去の遠忌に相当する年代を遡ってみてみると、表6のようになる。これをみると三百遠忌から五百遠忌にかけて、ゆかりの寺院では法要が厳修され、報恩のための石塔が建立されていることがわかる。身延覚林坊では、寛政十一年（一七九九）四月に日朝の三百遠忌を修していた記録がある。さらに、同寺では祈願札が所蔵されているが、これには、

嘉永二酉年

南無日朝大上人

日朝信仰について（望月）

奉漸読妙経一千部成就之

三百五十遠忌報恩

観応院日運

敬白

と、三十世日弘代、三百五十遠忌の正当にあたる嘉永二年（一八四九）六月二十五日に報恩法要が厳修されている。この折には、覚林坊でも朝師堂の屋根葺き替えの記念事業を行なっていた記録がある。<sup>33</sup>また、『身延山史年表』によると遠忌の記述は、「嘉永二年六月十七日、日朝上人三百五十遠忌千部会奉行」<sup>34</sup>、「昭和二十四年四月二十三日、日朝四百五十遠忌法要を覚林坊で奉行し、戦後最高の人出五万人、身延線臨時列車増発され、富士身延講参拝する」<sup>35</sup>とあり、それぞれ、嘉永二年（一八四九）に三百五十遠忌、そして昭和二十四年に四百五十遠忌と、法要や記念行事が行なわれていたことが確認できる。こうして身延山において執行された日朝に關しての遠忌法要は五十年毎であり、その際に報恩のための法会が行なわれていたのである。

### 報恩塔の建立

ここでは、日朝報恩塔の建立について、各地の寺院の石塔を調査し、その銘文を記録したものを紹介したい。表7がそれであるが、これには、明和五年（一七六八）の山梨県櫛形町蓮経寺の例を史料の初見として、江戸時代造立のほとんどは山梨県内の寺院であったことが知られる。明治時代になって東京、千葉にも建立され、それも明治三十二年（一八九九）に建立された例が多い。具体的には仏成寺、誕生寺、長遠寺、経王寺、覚林坊で建立され、いずれも

表7 日朝報恩塔の建立

	年月日	西暦	寺院名	寺院所在地	銘文	備考
1	明和五、九、	一七六八	蓮経寺	山梨県中巨摩郡櫛形町 桃園	(右側面) 明和第五年子九月日「当寺十三世海仙院日澄」 (正面) 明応九庚申年「行学院日朝上人」 (左側面) 願主「当村宗門一結中」	
2	安永九、冬	一七八〇	本覚寺	静岡県三島市泉町	(右側面) 当山二世 明応九年庚申 六月二十五日 (中央) 南無日朝上人 (左側面) 安永九年庚子冬再建之「第三十五世」日遵代	
3	天明元、六、二十五	一七八一	円応寺	山梨県南巨摩郡南部町 上佐野	(正面) 天明元辛丑天六月廿五日「行学院日朝力」潮(朝力)上人「眼病清願 願主 佐野重右衛門」	
4	寛政八、十二、	一七九六	福王寺	山梨県中巨摩郡白根町 飯野	(右側面) 明応九庚申六月廿五日「(正面) 眼病」日朝大上人「救護」 (左側面) 寛政八丙辰十二月日 世主面々「十七世日授代」	
5	寛政九、六、二十五	一七九七	円応寺	山梨県南巨摩郡南部町 上佐野	(右側面) 寛政□□九子天六月廿五日「(正面) 明応九庚申六月二十五日」 行学院日朝上人 眼病清願 下佐野村柿本佐野源兵衛	同町下佐野法源寺(円応寺と合併)に建立されていたものが移転

日朝信仰について(望月)

日朝信仰について（望月）

6	文化七、六、二十五	一八一〇	覚林坊	山梨県南巨摩郡身延町身延	(右側面) 経「庚午」文化七年 (正面) 南無行学院「経」日朝大上人 (左側面) 六月廿五日立「経」	
7	弘化四、	一八四七	感応寺	静岡県静岡市駒形通	(右側面) 明応九庚申「六月廿五日」 (中央) 当山中興「行学院日朝大上人」 眼病守護 (左側面) 弘化四丁未年「三百五十遠忌予修」	上部に首題、二仏勸請、下部に施主名あり 二十七日瑞代建立
8	嘉永二、七、二十五	一八四九	本成寺	山梨県南巨摩郡中富町	(右側面) 行学院日朝大上人「三百五十遠忌之印塔」 (正面) 南無妙法蓮華経 日随（花押） (左側面) 維持嘉永二己酉年「七月二十五日造立」	日随は本成寺二十六世
9	安政四、十一、	一八五七	源立寺	山梨県南巨摩郡南部町井出	(右側面) 安政四丁巳十一月日「再興東西八木沢中 施主面々」 (正面) 延山十一世「行学院日朝大上人」 明応九寅 六月廿五日 (左側面) 発起人佐野要左衛門立之	
10	明治三十二、二、二十四	一八九九	仏成寺	山梨県南巨摩郡南部町成島	(右側面) 明治三十二年二月二十四日 (中央) 南無妙法蓮華経「開山日朝大上人四百遠忌報恩塔」 (左) 檀方中	
11	明治三十二、六、二十五	一八九九	誕生寺	千葉県安房郡天津小湊町小湊	(正面) 四百遠忌御報恩塔「 (右側面) 発起人」堂守福沢妙孝」	寺尾英智氏作成「誕生寺金石文調査報告

<p>13 明治三十二、六、 一八九九</p>	<p>長遠寺</p>	<p>山梨県中巨摩郡若草町 鏡中条</p>	<p>(正面) 行学院日朝上人 南無妙法蓮華經 恵光山日謙(花押) 四十五世「四百遠忌報恩塔」 (左側面) 日朝上人御遠忌際世話人並有志奉 納面々現「安後善」上人御分骨朝師堂再建 折袴堂瓦葺替唱題「三万部水行一百日成 就」明治廿二年六月「特別当」横村海音</p>	
<p>12 明治三十二、六、 二十五</p>	<p>一八九九</p>	<p>本照寺 神奈川県厚木市下古沢</p>	<p>(右側面) 明治三十六年六月廿五日「 四百遠忌妙経 報恩塔」 一字一石」 (中央) 開山日朝大上人 (左側面) 常栄山三十五世一修院日行」 功德主 檀越」 信徒中」</p>	
			<p>(左側面) 行学院日朝大上人」 (背面) 明治三十二年六月廿五日「小湊山」 六十二世日令(花押)」 (台正面) 当村」 世 藤本」 土) 森」 話 山田」 (中 吉野」 人 森井」 斎藤」 渡邊」</p>	<p>書</p>

日朝信仰について（望月）

14	明治三十二、 一八九九 経王寺	東京都台東区元浅草	(正面) 南無妙法蓮華經 長興長栄 六十八世「日龜 (花押)」 (右側面) 日朝大上人四百遠忌報恩塔 (左側面) 明治三十式年己亥長昌山廿八世 日猷代建之
15	(明治三十二) 九	妙幸寺 東京都大田区西糀谷	(正面) 南無妙法蓮華經 日蓮大菩薩 日朝大上人四百遠忌
16	(明治三十二) 九	覺林坊 山梨県南巨摩郡身延町 身延	(正面) □賀阿闍梨 日朝大上人 (右側面) 第四百遠忌「経」報恩之印塔 (背面) 明治□□「三百」第二十一 妙俊「朝師堂」惣世話人

四百遠忌の報恩塔となっている。こうして、明治期に至ると各地域に日朝信仰は広がりを見せ、これとともに遠忌の行事が定着していったのである。

開帳儀礼と御守・御符

次に、開帳儀礼における日朝信仰の姿についてみてみよう。松葉谷妙法寺（現在鎌倉市）の場合をみると、寛政十二年（一八〇〇）、文政四年（一八二二）、天保七年（一八三六）、嘉永七年（一八五四）と、江戸時代に四回、祖师像や所蔵する宝物の江戸出開帳を行っている。この儀礼の中で、日朝の仏像一体と日朝筆の曼荼羅本尊一幅も寛政十二年を除く三回出され、江戸の人々に礼拝されている。

表8 御殿上り御守御符洗米等一覧（用意する分）

名 称	文政13	安政4	文久3	備 考
祖師縁起	20冊	20	20	
靈宝目録書	1冊	2	1	
祖師御影	100幅	100	100	
七面宮御影	100幅	100	100	
鬼子母神御影		100		
大菩薩号	50幅	50	50	
大型御旗曼荼羅	50幅	50	50	
小型御旗曼荼羅	100幅	100	100	
消毒御符	500幅	1000	500	
虫切御符	500幅	500	500	
朝師眼洗御符	300幅	300	300	
開運守	300幅	300	300	
除災難守	300幅	300	300	
祖師洗米	1000幅	1000	1000	
七面宮洗米	1000幅	1000	1000	
祖師木像	10体		10	厨子入
七面宮木像	10体		10	厨子入

註 文政13年は霞ヶ関御殿に御上りする分

（出典）身延山久遠寺身延文庫蔵

身延山の祖師像が江戸出開帳の場合をみると、深川浄心寺において開扉され、江戸に住む人々に礼拝された。その後、祖師像は江戸城に上っており、ここで生活する大奥女性に礼拝された<sup>57)</sup>。表8は、その折に用意された御守・御符であるが、これを見ると、身延山の縁起や祖師御影・七面宮御影とともに、日朝信仰の対象となる御守や御符も出されていることがわかる。この中に、朝師眼洗御符といったものが、文政十三年（一八三〇）、安政四年（一八五七）、文久三年（一八六三）にそれぞれ三百個ずつ用意されたことに注目した

い。実際にどれだけ求められたかということをみると、安政四年の場合で、眼洗御符が九月十七日に二百個、同二十七日に百個、十月十六日に百個、同十七日に二百個、二十七日に百個と合計七百個が求められた記録がある<sup>38)</sup>。これには「御土虫きり御符<sup>39)</sup>、眼洗い御符沢山お廻し成され候<sup>39)</sup>」と、ご利益があったためか、たくさん用意してもらおうやう大奥女性希望していたことがわかる。また、この出開帳は江戸城だけではなく、徳川御三卿の田安家といった御殿にも上っており、ここでも同じようにその御殿女中により眼洗御符類が求められていた記録がある<sup>40)</sup>。勿論他の祈願

日朝信仰について（望月）

### 日朝信仰について(望月)

内容の御符類も多く求められていたわけであるが、数量の上では、消毒御符に次いで二番目に求められていたことからして、眼洗御符はかなりのご利益があったといえる。また、開帳時に日朝筆曼荼羅本尊や日朝像が同時に出示されていることは、大奥女性の間に眼病守護の対象として日朝信仰が定着していたことを示しているといえよう。

### 三 信仰の地域的伝播

#### 江戸における日朝信仰

次に日朝信仰の地域的展開を、江戸市域の場合を取り上げてみることにしたいと思う。

日蓮宗の開祖日蓮の他に、現在までの教団の著名な先師としては、多くの僧侶があげられる。その中でも、史料の上から江戸時代の江戸に住む人々に信仰された日蓮宗の先師に日親、日仕がある。日親は、江戸市域の寺院に親師堂(日親堂)が存在し、日仕は日仕門流の派祖として仰がれている<sup>(4)</sup>。そこで、江戸時代の江戸市域における日朝信仰に關してはどうかみていくことにしたい。

江戸の町名主斎藤月岑は、天保九年(一八三八)に江戸の年中行事を記した『東都歳時記』を出版したが、その正月二十五日の頁を<sup>(5)</sup>みてみると、

毎月 深川浄心寺日朝上人参詣

毎月 麻布長坂町大長寺日朝上人像開帳

と、深川浄心寺と麻布大長寺(現在府中市)の日朝像の開帳が毎月二十五日にあり、近郊の人々が参詣していた様子が記されている。この史料に登場する事項は、江戸の年中行事として庶民の間に知られていたことを示している。こ

のうち、大長寺では、

日朝上人麻布永坂

御 供 米

正五九月千卷陀羅尼並説法

毎月廿四五日題目講

(43)

と、供米として正月・五月・九月の祈願月に千卷陀羅尼修行を行なっていたことがわかる。そして、毎月二十四日・二十五日は題目講中が集まって講を開き、その場で僧侶による説法があった。また、次の史料をみてわかるように、

麻布永坂大長寺

南無日朝大聖人

本願主

辰年男

毎月御縁日九日

敬白

廿五日

披露

来子三月九日に御五眼の御守り指出し申候<sup>(44)</sup>

と、毎月の縁日は九日、二十五日の両日で、本願主として辰年男性の祈願を行なっていたことが推察される。そして、三月九日より「御立眼の御守」といった靈験ある御守を出していたことが披露されている。また、「御府内寺社備考」という江戸地域の寺院の詳細を書き上げた史料があるが、これには、

日朝信仰について(望月)

日朝信仰について（望月）

深川浄心寺 日朝上人石像 座像長二尺六寸三分

右二間二九尺之土蔵江安置但拜書附

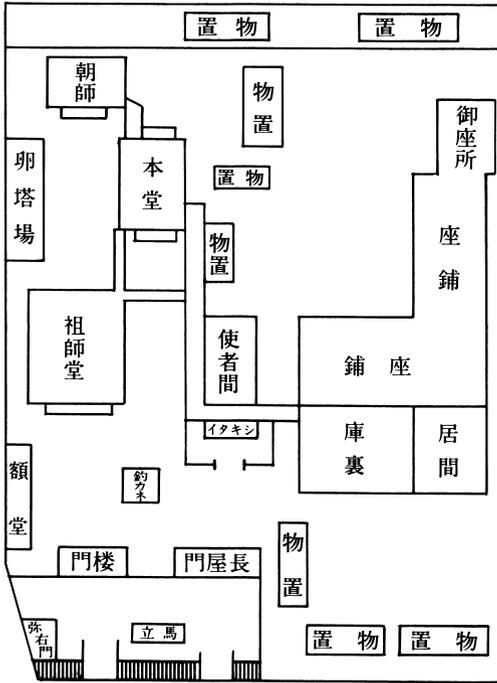
浅草幸龍寺 日朝石像<sup>(46)</sup>

と、深川浄心寺<sup>(46)</sup>と浅草幸龍寺<sup>(47)</sup>に日朝の石像が祀られていたことが知られるのである。

堀の内妙法寺における日朝信仰の姿

(図4)

天保年間の本山妙法寺境内図  
(出典 杉並区妙法寺所蔵文書)



次に、堀の内妙法寺の日朝堂に関わる日朝信仰の姿についてみていきたい。堀の内妙法寺に存在する日朝堂の最初の堂宇の建立時期は不明だが、既に文政十一年（一八二八）の段階で大破してしまったことが史的にみられる。そこで再建願いを提出し、翌年完成して現在に至っている。文政十一年以前は祖師堂の後ろ

にあったとされているが、図4をみると、天保年間は間口二間、奥行三間の大きさで本堂後ろにあったことが確認できる。この堂宇は先述した通り、以前あったものが、現堂宇は間口四間、奥行五間として再建されたものである。堂宇の規模は以前に比べて大きくなり、妙法寺の諸堂宇の中でも祖師堂、本堂に次ぐ大きさである。堂宇の大きさは参詣者の数に正比例するというが、この大きさからいって多くの人が行事の折に堂内に入り、参詣したと考えられよう。日朝堂内に奉安される日朝像は鞘像と胎内像になっており、鞘像の台座裏銘文<sup>48</sup>をみると、

文政十一 戊子六月廿五日

朝師堂普請成就入像供養

行学院

日朝上人

尊像一体

新造

日岡山二十世 松寿院 日現(花押)

京都仏師 如水作之

と、文政十一年(一八二八)六月二十五日の銘がある。この日は日朝堂の開堂入仏供養を行った日であり、像の形態をみると、鞘像は読経像、胎内像は説法像になっている。妙法寺の年中行事の中では、正月二十五日に日朝堂経典読誦日となっており、年の始めの法会が日朝堂で営まれる。現在でも六月二十五日には、「日朝御命日」として日朝堂

日朝信仰について(望月)

日朝信仰について(望月)

で法要が厳修されている。この法会は、忌日法要と眼病平癒の祈祷といった両面を兼ね備えているが、祈りの多くは現世利益の欲求が強かったと思われる。それは、妙法寺は厄除け祖師像が有名であり、祖師堂の裏手に位置する日朝堂に祀られる日朝は、眼病守護・学業成就といった祈願が多いことが、現在も奉納される絵馬からも知ることができる。

次に、江戸時代の日朝堂内に安置されている仏具の銘文をみると、三寶形賽銭箱<sup>(49)</sup>には

(正面) 芳町川

通東国屋弥七

奉

納

(裏面) 天保九年戊戌年三月吉日

東都大門通

鑄工伊勢屋彦助作

と、天保九年(一八三八)三月吉日付の奉納銘があり、江戸時代後期には、日朝堂を荘厳する仏具類が江戸に住む信者層によって奉納されたことがわかる。天保二年(一八三一)九月吉日銘の香炉<sup>(50)</sup>には、「七日講中趙町おてつ」と、江戸庶民の組織する講中の名称が登場したが、これは祖師堂に参詣する講中で、縁日の毎月七日、祖師堂に詣でた後に日朝堂に参詣していた様子を知ることができる。また、香炉左側面には、「や組藤治郎・彦兵衛・金蔵<sup>(51)</sup>」といった

火消し組員の名前がみられることは、江戸の庶民信仰の対象となっていたことを示している。そして、文久二年（一八六二）七月吉日銘の鰐口<sup>(32)</sup>には、

（裏面） 文久二壬戌年七月吉日

講中施主面々

世話人

米良氏

三浦氏

高野氏

山口氏

中村氏

林谷氏

（以下下段）

中村屋寅吉

泉屋松五郎

大和屋辰右衛門

赤坂連中

ま組頭取中

同抱中

同若者中

同道具中

赤坂芸者中

と、世話人・本願主として麻布谷町に住む人々の連名や「赤坂芸者中」といった職種の人々の名前もみられ、様々な階層の人々によって日朝堂が支えられていたことがわかる。さらに、文政十年（一八二七）二月には、日朝堂再建願いが信徒より出され、その結果、建立された堂宇の擬宝珠<sup>(33)</sup>には、

① 文政十一年子八月廿二日

芝桜田 河内屋

③ 文政十一年子八月廿二日

芝桜田 河内屋

日朝信仰について（望月）

日朝信仰について（望月）

施主 善右衛門

施主 善右衛門

家内安全

家内安全

子孫長久

子孫長久

② 文政十一年子霜月

④ 文政十一年子霜月

霊岸島講中

霊岸島講中

面々家内安全

面々家内安全

と、文政十一年（一八二八）八月二十二日の銘文が記されており、施主の祈願内容をみると、「家内安全・子孫長久」といったことが刻まれている。<sup>54</sup>つまり、妙法寺の参拝者の主たる祈りは、同じ境内にあっても、祖師堂・日朝堂とは違っていた。つまり、祈願の主目的が祖師は厄除け、日朝が眼病平癒・学業成就といったことで、それぞれ異なっていたわけで、庶民信仰の上では住み分けができていたと考えられる。

まとめに

以上、日朝に対する信仰は、「日朝信仰」や「朝師信仰」と呼称したが、清正公信仰に代表されるように日朝に対する崇拜の念が人神信仰として、江戸時代を迎えると庶民信仰の世界に顔を覗かせるようになる。本稿で検討した日朝に対する信仰形態は、江戸時代後期の日朝堂の建立や日朝像の造立、そして伝記の作成等により、各地のゆかりの寺院を中心に信仰圏が形成された。そこにおける日朝の姿は、行学二道に励み、経力による眼病の克服が描かれていたのである。したがって、礼拝の対象となる尊像は管見する限り読経像か説法像がほとんどであった。ここで庶民の

日朝信仰の形態をまとめると、次のようになる。

- (1) 日朝木像、日朝曼荼羅本尊等を礼拝する、
- (2) 日朝堂や日朝像が奉安される堂宇に仏具、什物類を奉納する、
- (3) 講中を結成し、ゆかりの寺院の年中行事に参加する、
- (4) 学業成就・眼病平癒の祈禱を依頼し、御守、御符を受け取る、

この全てにみられる日朝信仰の特色は、奉納絵馬にみられるように、眼病平癒の信仰が第一であったといえよう。その信仰の拠点は廟所のある身延覚林坊であり、各地域においては寺院に祀られる日朝像・日朝画像・日朝曼荼羅本尊等といったゆかりの宝物が礼拝対象であった。中でも木像は、各地の身延門流の末寺や日朝自ら開創した寺院、由緒寺院等を中心に造立され、ゆかりの宝物は護持されていた。江戸時代に入ると庶民の眼病平癒のニーズと相俟って、山梨県・静岡県・関東地方に日朝を勧請する堂宇や木像が造立され、そこが地域における眼病守護信仰の拠点となっていたのである。江戸時代中後期には、寺院側が作成した縁起による霊験や木版刷日朝像の頒布により、日朝の霊性や現世利益の内容が広く全国に宣伝された。さらに、これが幕末・明治期に入ると身延山信仰の高揚とともに身延山中興の祖としての日朝の存在もクローズアップされ、次第に御利益の面も伝播し、ゆかりの霊場に参詣するといった信仰形態が定着していったと考えられる。流行り廃りのある守護神の中で、現在も日朝が勧請される場所において、その縁日に行なわれる儀礼や檀信徒の信仰活動を見ると、そこには、眼病の守護神としての祈りが反映されているのである。すなわち、江戸時代から現在に至るまで、日蓮宗内の眼病平癒の祈願を一手に引き受け、日朝信仰が庶民信仰の中に位置づけられていたといえよう。

日朝信仰について（望月）

今後は、各地の日朝像や堂宇の調査を行い、各地の民俗調査も含めて、日朝信仰を様々な視点からみていくことにしたい。

（註）

- (1) 『日蓮宗事典』六七七―六七八頁。
- (2) 日朝が身延住持となった年代は、寛正三年（一四六二）説（『日蓮教団全史』）と寛正二年（一四六一）説（『身延山史』・六牙院日潮『本化別頭仏祖統紀』）があるが、本稿では寛正三年説によった。
- (3) 日朝の伝記や著作に関しては、室住一妙著『行学院日朝上人』、身延山久遠寺編『行学院日朝上人』がある。
- (4) 室住一妙氏は、一に信行制度の確立、二に教学の総合研究、三に本院の移転事業、四に祖書の収集謄写と注釈の聖業、と四つにまとめている（『行学院日朝上人』四七頁）。
- (5) 『身延山史』（身延山久遠寺刊）八二―八四頁。
- (6) 『補施集』法師品奥書、山梨県南巨摩郡身延町、身延山久遠寺内身延文庫所蔵文書。
- (7) 右同、序品奥書。
- (8) 室住前掲書一一四頁。
- (9) 『日蓮宗の祈祷法』一一三―一二四頁。
- (10) 右書一二四―一二六頁。
- (11) 『身延山史』六三頁。
- (12) 他にも日朝自筆の曼荼羅本尊の被授与者の性格やその居住地域の分布により信仰圏を捉える方法があるが、これは今後データが揃い次第検討していきたいと考えている。
- (13) 身延文庫所蔵文書。なお、この史料は北沢光昭氏校註・身延山短期大学編纂によって、昭和五十九年三月『樓神』五十六号に翻刻紹介されている。
- (14) 身延文庫所蔵文書。

- (15) 右同。
- (16) 右同。
- (17) 右同。
- (18) 明治二十八年（一八九五）三月に日朝を描いた絵馬を応瑞一前という絵師が奉納しており、現在も日朝堂に掲げられている。
- (19) 『大田区史』資料編寺社1・付図2。この絵図には常題目堂とある。
- (20) 日行寺日朝像は『日蓮宗寺院大鑑』（池上本門寺刊、五七二頁）によれば、岡崎善立寺に勧請されていたものを同寺焼失後、移転したと伝えられている。
- (21) 齊藤月岑著、本稿は東洋文庫本（朝倉治彦校註）を使用した。
- (22) 六牙院日潮著『本化別頭仏祖統紀』（京都本満寺刊）。
- (23) 宇佐美朝善寺所蔵。
- (24) 身延文庫所蔵文書。
- (25) 鼠山感応寺は、天保五年（一八三四）に江戸幕府によって取立てとなったが、天保改革の風紀肅正で、わずか六年で取り潰しとなった寺院である。しかし、この間に大奥女性が代参し、賑わっていた様子が「檀楓」（『新編若葉の梢』所収）という地誌類に記されている。なお、江戸城大奥女性と感応寺の信仰的なつながりに関しては稿を改めることにしたい。
- (26) 尊像版木裏面墨書銘文、伊東市朝善寺所蔵。
- (27) 朝善寺には、絵馬が多く所蔵されている。この絵馬には奉納者と祈願内容が記されているが、この中で年記があるものは少ない。本稿では年記のあるものに限って分析の対象とした。
- (28) 他に日朝関係のものとして消毒符や虫切符もある。これは身体の清浄や子供の夜泣きといった虫封じ等の祈願であり、こうしたご利益信仰の要素も備わっていたのである。
- (29) 万寿亭正二作。
- (30) 『江戸学事典』（弘文堂刊）五九一―五九三頁。
- (31) 中尾堯氏は、「関東地方は関東 ROOM という火山灰の土質のために、春先などには土ぼこりが舞い上がり、目を患う農民

日朝信仰について（望月）

日朝信仰について（望月）

- が多かった」（『日蓮の寺』、東京書籍刊、二〇二頁）としており、庶民に眼病平癒の願掛けがあつたことを指摘している。
- （32） 身延町覚林坊所蔵。
- （33） 『身延山坊跡録』（身延文庫所蔵文書）。
- （34） 二五〇頁、『身延山史』二四八頁。
- （35） 三四八頁。
- （36） 北村行遠『近世開帳の研究』一八三―二二三頁。
- （37） 江戸城大奥女性の信仰に関しては、拙稿「江戸城大奥女性の法華信仰と身延山久遠寺の江戸出開帳を中心に」（『大崎学報』一四六号所収）に詳しく述べたので参照されたい。
- （38） 拙稿右論文。
- （39） 文久三年・安政四年「開帳記録」、（身延文庫所蔵文書）。
- （40） 拙稿「前掲論文」八五頁。
- （41） 拙稿「江戸の日蓮宗の年中行事（三）」（『身延論叢』四号所収）。ここで、江戸の日蓮宗の先師信仰について、日親・日什・日朝をあげた。
- （42） 東洋文庫本『東都歳時記』1（朝倉治彦校註）一三八頁。
- （43） 府中市大長寺所蔵。
- （44） 府中市大長寺所蔵。
- （45） 『御府内寺社備考』法華宗・一向宗（名著出版刊）。
- （46） 校註者朝倉治彦氏は、祖師堂前に日朝上人堂があり、堂宇は二間に九尺の土蔵造であつたとしている（東洋文庫本『東都歳時記』1・一三九頁）。
- （47） 現在は世田谷区烏山にある。
- （48） 『妙法寺文化財総合調査報告書』（杉並区教育委員会刊）七二頁。
- （49） 右同、七四頁。
- （50） 右同、一八三―一八四頁。

(51) 右同、二八二頁。

(52) 右同、二八二―二八三頁。

(53) 右同、二八三頁。

(54) 現在の妙法寺日朝堂の前には、受験合格の絵馬が奉納されており、これが現代社会における日朝への祈りの内容を反映しているといえよう。

(付記) 日朝関係資料を快く提供していただいた所蔵者各位、また資料調査にご協力を頂いた寺院各聖に対してこ

の場を借りてお礼を申し上げ、その学恩に謝する次第です。

日朝信仰について（望月）